

長野県中野市

高梨氏館跡発掘調査報告書

— 2000. 3 —

中野市教育委員会

長野県中野市

高梨氏館跡発掘調査報告書

— 2000. 3 —

中野市教育委員会

刊行にあたって

高梨氏館跡は東方の鴨ヶ嶽の山城とともに、戦国時代に活躍した北信濃の有力な武士、高梨氏の全盛期に残された遺跡であり、この地方の戦国時代の歴史を語るうえで欠かすことのできない貴重な歴史的遺産であります。

大切に保存されてきた高梨氏館跡は都市計画法に基づく近隣公園「高梨氏館公園」として整備されることとなりました。公園整備にあたっては遺跡の保存を優先させ、往時の姿をできるかぎり再現することになっております。

今回の調査は公園整備工事に先立ち、南東部の堀の状況を明らかにするために実施されました。調査の結果土塁側についてはほぼ完全な形で残されておりましたが、反対側については宅地化により一部削減されていました。本報告書はその結果を報告するものです。

本報告書が高梨氏館跡の保存の一助となれば幸いです。最後になりましたが、ご協力を賜った関係者の皆様に篤く御礼申し上げます。

平成12年3月

中野市教育委員会

教育長 宮川洋一

例　　言

1. 本報告書は、中野市小館「高梨氏跡公園」整備に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 調査は中野市教育委員会が行った。
3. この報告書は、今回の調査結果とこれまでの調査の要旨を要約し、再掲載した。
4. 報告書の執筆は市学芸員が行った。

―― 目 次 ――

第1章 はじめに.....	1	(1) 土壘と堀.....	8
第1節 調査の動機.....	1	(2) その他の遺構.....	12
第2節 これまでの調査の経過.....	1	第2節 遺物.....	12
第2章 遺跡と調査の概要.....	3	(1) 高梨氏館跡出土の中世土師皿の分類.....	12
第1節 遺跡の概要.....	3	(2) 高梨氏館跡出土の中世土師皿の編年.....	15
第2節 調査概要.....	5	(3) 銭貨.....	16
第3章 今回の調査の結果.....	8	第3節 館廻りの堀の比較検討.....	18
第1節 遺構.....	8	第4章 まとめ.....	23

―― 図表目次 ――

第1図 遺跡の位置(1).....	2	第11図 高梨氏館跡出土の中世土師皿の分類.....	13
第2図 遺跡の位置(2).....	3	第12図 高梨氏館跡出土の中世土師皿の変遷.....	13
第3図 高梨氏館跡と館廻.....	4	第13図 土器.....	14
第4図 地租課税のために製作された切図.....	5	第1表 土器観察表.....	15
第5図 調査区.....	6	第14図 銭貨.....	16
第6図 土壘・堀平面図.....	7	第2表 銭貨観察表.....	17
第7図 第1～3トレンチ.....	9	第15図 これまでの土壘・堀平面図.....	18
第8図 第4、5トレンチ.....	10	第16図 これまでの土壘・堀断面図(1).....	20
第9図 第6トレンチ.....	11	第17図 これまでの土壘・堀断面図(2).....	21
第10図 集石.....	12		

写真目次

写真 1 発掘作業風景	26	写真 16 第4トレンチ完掘	32
写真 2 発掘作業風景	26	写真 17 第5トレンチ完掘	32
写真 3 第1トレンチ礫層除去後	26	写真 18 第5トレンチ土壙断ち割り	32
写真 4 第1トレンチ完掘	27	写真 19 第6トレンチ表土除去後	33
写真 5 第2トレンチ礫層除去後	27	写真 20 第6トレンチ表土除去後	33
写真 6 第2トレンチ礫層除去後	28	写真 21 第6トレンチ完掘	33
写真 7 第2トレンチ完掘	28	写真 22 第6トレンチ完掘	34
写真 8 第3トレンチ礫層除去後	28	写真 23 第6トレンチ完掘	34
写真 9 第3トレンチ完掘	29	写真 24 第6トレンチ内集石第1面	34
写真 10 第3トレンチ完掘	29	写真 25 第6トレンチ内集石第2面	35
写真 11 第4トレンチ礫層除去後	29	写真 26 第6トレンチ内集石第3面完堀	35
写真 12 第4トレンチ西面石積	30	写真 27 98年度調査区セクション	35
写真 13 第4トレンチ完掘	30	写真 28 98年度調査区セクション	36
写真 14 第4トレンチ完掘	31	写真 29 第3トレンチ かわらけ出土状況	36
写真 15 第4トレンチ完掘	31	写真 30 第3トレンチ 内耳土器出土状況	36

第1章 はじめに

第1節 調査の動機

長野県指定史跡の高梨氏館跡は、明治9年以降高梨氏の後裔が所有し、管理してきた。しかし、昭和61年、高梨氏からの申し入れもあり、宅地の一部を残して、中野市に管理が移ることとなった。

中野市教育委員会は中野市への史跡の管理が移管することに伴い、高梨氏館跡の保存と活用を策定するため、県教育委員会と協議を重ね、昭和61年秋、試掘調査を実施した。

昭和62年度に、高梨氏館跡を中心とした都市計画法に基づく公園整備計画が中野市により策定され、整備のための発掘調査が必要となった。こうして、高梨氏館跡の発掘調査は昭和62年度から平成4年度まで、6ヶ年継続して行われることとなった。

その後、平成6年度と平成10年度に追加調査が行われている。

第2節 これまでの調査の経過

1. 昭和62年度の調査

昭和61年度から実施した試掘確認調査を継続し、土壘内の遺構の確認調査を行った。特に庭園の広がりを把握することに努めた。この結果、館跡東半分に礎石建物群、庭園、西側に広場的な空間を確認することができた。

2. 昭和63年度の調査

昭和63年度の調査は高梨氏居宅が館跡の北西部への移築に伴い発掘調査を実施した。この結果、館跡西端部の建物跡群が確認された。また、部分的に試掘坑を設け、調査した結果、遺構確認面より下位に何層かの遺構面が存在することが明らかになった。

3. 平成元年度の調査

平成元年度の調査は公園整備事業のため土壘内部

の調査を一時中断し、土壘と堀の調査を実施した。通用口となっていた南側入口と西側入口の土壘をトレントで断ち割り調査した。その結果、南側入口の土壘内には築地塀が存在し、隣接して池状の遺構が確認された。したがって、南側入口は後世になって設けられたものと判断された。西側入口では、当時の門の礎石が残存し、暗渠などの施設が確認され、館の正面入口としての機能が考えられた。

4. 平成2年度の調査

平成2年度の調査は、引き続き土壘と堀の調査を行い、館内への給水と排水を究明する目的で、北東隅と南側中央部分の土壘を調査した。その結果、館内及び池から排水する水路と暗渠を検出した。また、東側入口とその北側土壘をトレント調査するとともに、土壘内面の石積造構を確認した。

5. 平成3年度の調査

平成3年度の調査は、奈良国立文化財研究所の細見啓三氏、本中真氏の指導を受け、建物跡と庭園跡の遺構調査を実施した。建物跡群については、数棟分の礎石群を確認し、庭園跡については池の掘り下げにより、規模や形態を確認した。

6. 平成4年度の調査

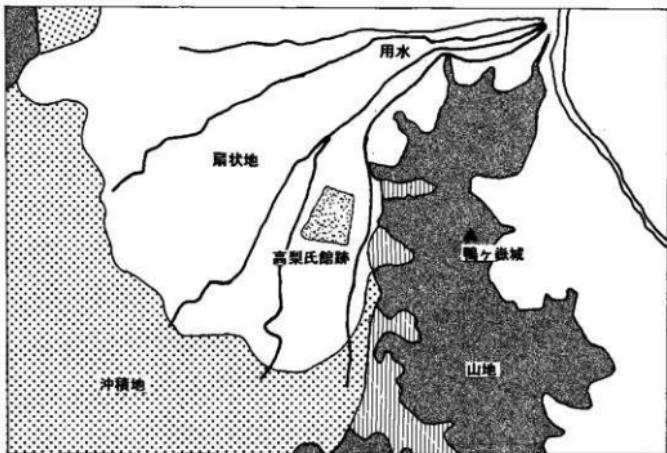
平成4年度の調査は、庭園跡の縁石ならびに周囲の配石について精査し、景石の抜き穴を確認し、一部復元を行った。また、建物跡については抜き穴を中心に精査し、9棟の建物跡を確認した。

7. 平成6年度の調査

平成6年度の調査は、平成2年度の調査の際に遺跡復元整備の方針が決定するまで保留となっていた、東小口の再調査を実施した。この2回の調査により、東小口の構築が4期に分けられることを明らかにした。



第1図 遺跡の位置（1）



第2図 遺跡の位置 (2)

8. 平成 10 年度の調査

平成 10 年度の調査は、館の南西角の堀を調査した。堀の中まで住宅が建築された部分であるため、堀の

外側の壁は住宅建設等により、すでに搅乱を受けていた。

第2章 遺跡と調査の概要

第1節 遺跡の概要

1. 遺跡の位置と立地

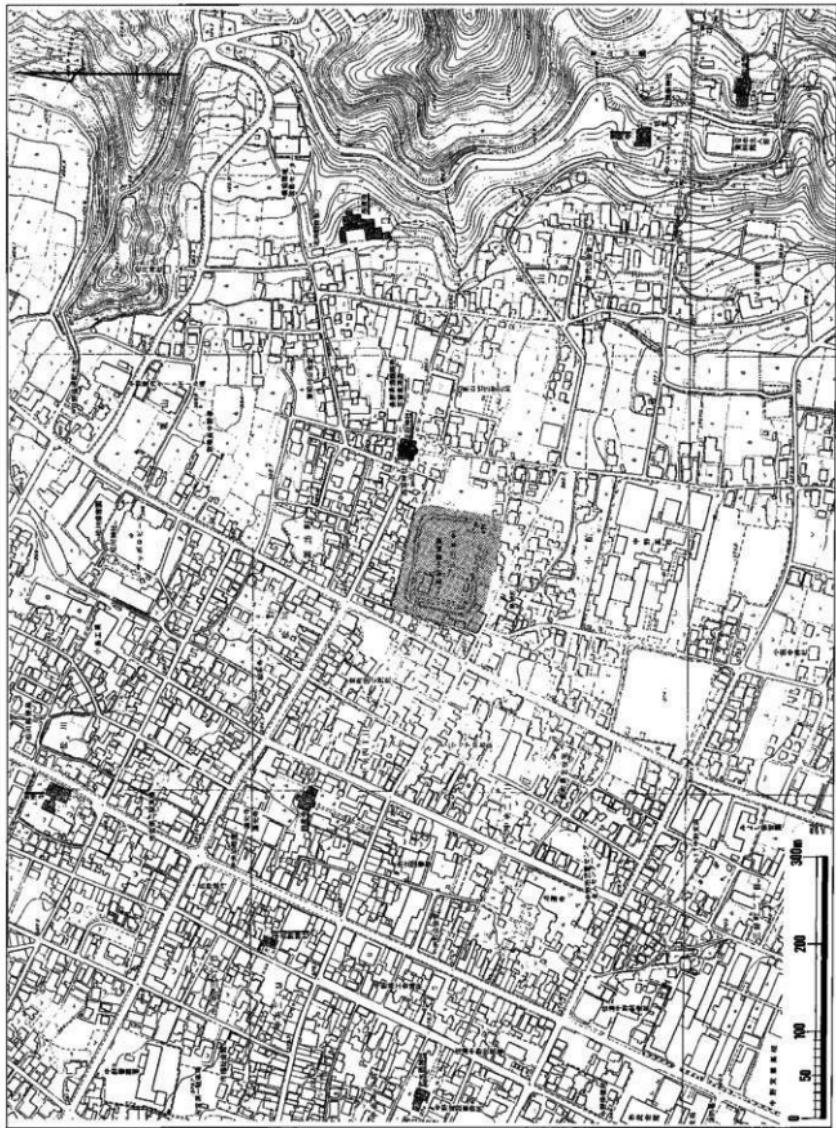
高梨氏館跡は中野市大字中野字小館 1609-1 番地、北緯 $36^{\circ} 22' 49''$ 、東経 $138^{\circ} 44' 27''$ に位置する。

中野市は長野盆地北端に位置し、長野盆地の東を画する河東山地から流れ下る夜間瀬川は大きな扇状地（中野扇状地）を形成している。その広さは東西約 7km、扇頂と扇端の比高差は約 150m を計測する。扇端部から南方の小布施扇状地との間に延徳田園と呼ばれる千曲川の後背湿地が広がり、葦などの泥炭層が数 m も堆積している。（第1図）

高梨氏館跡は中野扇状地の扇尖部、東扇側部に近く、河東山地をなす箱山、鴨ヶ嶽の山麓部から 300m と離れていない。扇状地の東側部と山麓の間に旧河道が深い谷状の低地を形成している。（第2図）

中野扇状地における弥生時代以来の農耕集落は扇状地の南側に広がる千曲川の後背湿地との接点を中心早くから成立し、この扇側部にかけて弧状の広がりをみせている。

また、夜間瀬川の氾濫は扇状地西側に著しく、館跡を含む東側は比較的安定している。高梨氏館跡は鴨ヶ嶽城などの軍事的立地を背景としながら、水害を避けやすい位置に館を構えたとすることができよう。



第3図 高梨氏館跡と館廻

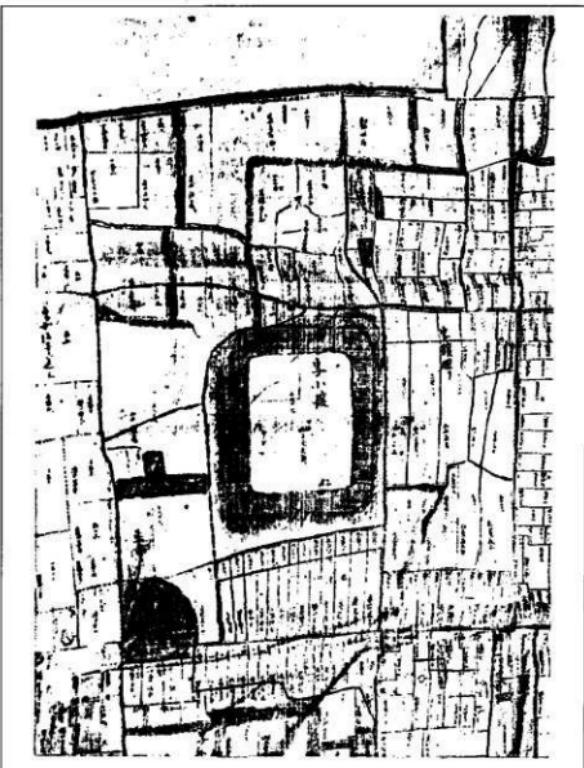
2. 高梨氏館跡の周辺

北信濃を代表する戦国期の領主・高梨氏の館跡は今日その姿をとどめているが、館跡を中心とした城下的割合はあまり明確ではない。

郷道哲章氏は館の軸の方向と現存する道路の方向から、高梨氏館跡の周辺に若干戦国期の城下的割合を想定している(郷道 1987)。館跡の軸と並行する東西方向の道やこれと直行する道が見られる範囲に沿って、高梨氏との関係を伝承する妙法寺・錦泉寺・泰清寺・南照寺・靈闇寺・王日神社・南宮神社・中日野神社・武水建神社・山神社・浅間社が半円をえがくように分布し、城下の外郭を画するのではないかと指摘している。(第3図)

一方、湯本軍一氏は、寛文検地帳から地名を追及し、高梨氏館跡の周辺に広い「館廻り」という字名が存在していたことを明らかにし、高梨氏館跡が、從来考えられていた

ようにたんなる単郭ではなく、防衛的施設の存在こそ不明であるが、二重に画された居館であることを明らかにした(湯本 1991)。また、高梨城下の主幹道路は、東南から「館廻り」に入り、居館の前を通って、西に向かう、通称「谷街道」と呼ばれていた道路であると指摘し、ここに街村状の城下の町屋部分の中心を想定している。また、脇道として、「谷街道」に並行して、「館廻り」の南の境界を東西に延びる道路と、「館廻り」の北を画すように東西に延びる道路があったとする。(第4図)



第4図 地租課税のために製作された切図

第2節 調査概要

1. 調査範囲と調査方法

高梨氏館跡の発掘調査は、昭和62年度から平成4年度までの6ヶ年継続調査、平成6年度における東小口調査及び平成10年度における館廻南西角堀割り調査が行われている。

今回の調査は館廻南東角の堀について、南側土塁の屈曲部から東側土塁小口に至る部分に加えて、これまでの発掘調査の際、土置場としていた館跡内東南角の未調査部分で、養蚕神社及び稻荷社のあったとされる部分を調査した。(第5図)

堀についてはトレンチ方式によるものとし、第1トレンチから第5トレンチまでを設定した。館跡内東南角の未調査部分については便宜上第6トレンチとし、全面発掘を行った。

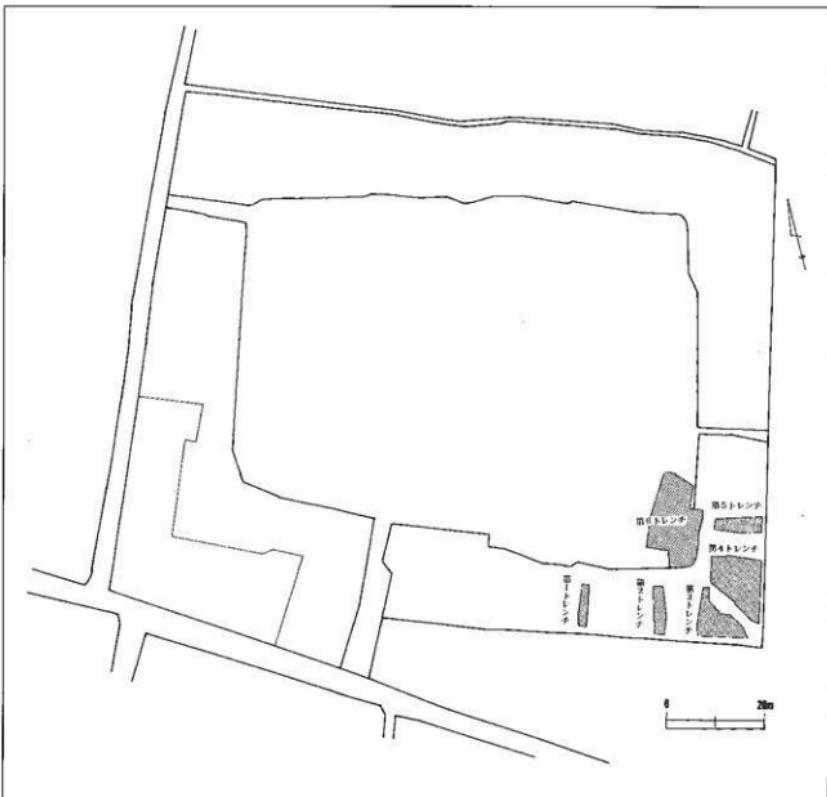
2. 調査結果の概要

今回の調査では、土星部分については過去に詳細な調査がなされているため、土星の裾部及び綾線の確認を行ったのみである。堀の部分については前述のとおり、第1から第5までのトレンチを設け、トレンチ内堀断面（推定）の標高を実測した（第6図）。

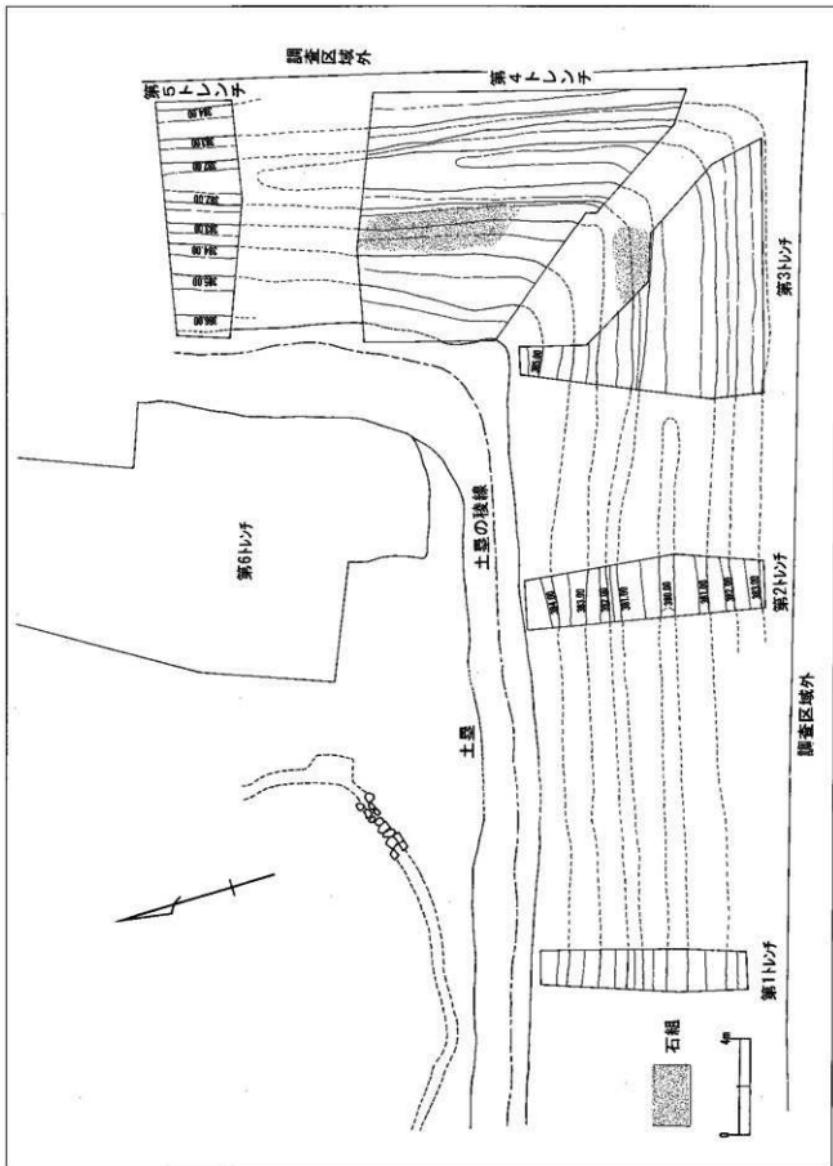
第1から第5トレンチの堆積層に共通するのは、薄く積もった表土（腐葉土）の直下に、最大のもので長径50cmの大小様々な川原石が50cm～1mの厚さで堆積している。この層には陶器片・瓶の破片など雑多な廃棄物が含まれていることからみても、最近の堆積層と思われる。

その下には70～120cmの厚さで、5～10cm程度の石を疎らに含む茶褐色土層が滲積している。

さらにその下には、1～2mm程の砂粒と5cm程の石が固く結まつた堀底面であろうと考える赤褐色砂質土層が存在する。固く結まつてはいるが、粘土



第5図 調査区



第6図 土壌・堤平面図

を貼って水を貯めた痕跡は見当らず、從来から云われているとおり空堀であろう。形状はU字形もしくはU字に近いV字形を呈している。この層の下部から中世土師皿が出土していることから、この層が中世の堆積層と思われる。

その下は、夜間瀬側の氾濫跡と思われる砂礫層である。1~2mm程の砂粒と5cm程の石から長径70cm程の礫が様々に混在し、ぎっしりと隙間なく堆積している。

過去に行われた調査結果（後述第15図）にも表われているが、館廻りの堀は北東の角が最も高く、南西の角に向かってしだいに低くなる傾向がみられた。これは館が扇状地地形上に存在するためであろう。

また館内東南角の部分（第6トレンチ）についても調査を行った。この部分は、福荷社・養蚕社・歌碑等が存在したところであり、その撤去の際搅乱されたものか、建物の痕跡は認められなかった。

第3章 今回の調査の結果

第1節 遺構

（1）土壘と堀（第7、8図）

1. 第1トレンチ

庭園南側に第1トレンチを設定した。平成2年度調査トレンチ（90-05）から西寄りに約5mの場所である。表土（以下第I層）、砂礫層（以下第II層）約0.4m、茶褐色土層（以下第III層）約0.6m、赤褐色砂質層（以下第IV層）約1.0mの4層から成る。第III層は更に2層に分かれる。第IIIa層は、第III層より灰色味を帯び、含水性の軟らかい層であり、堀の堆積土と考える。第IV層下部より中世土師皿（第13図7~10）が出土する。堀の断面はU字に近いV字形を呈している。堀幅約10.1m、現況の土壘頂と堀底の比高約6mである。

2. 第2トレンチ

平成2年度調査トレンチ（90-05）から東寄りに約5mの場所に第2トレンチを設定した。第I層、第II層約0.7m、第III層約1.0m、第IV層の4層から成る。第III層は更に4層に分かれる。第IIIa層は、第III層より灰色味を帯び、含水性の軟らかい層であり、堀の堆積土と考える。遺物はほとんど出土しない。堀の断面はU字形を呈している。堀幅約11.0m、現

況の土壘頂と堀底の比高約5.3mである。

3. 第3トレンチ

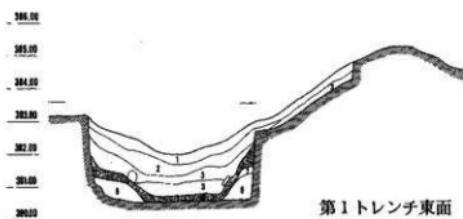
館廻り東南角西側に第3トレンチを設定した。第I層、第II層約0.5m、第III層約0.8m、第IV層約0.4mの4層から成る。第III層上部より中世土師皿（第13図1、2、4、5）及び内耳土器（第13図13）が出土する。堀の断面はU字形を呈している。堀幅約10.1m、現況の土壘頂と堀底の比高約6.3mである。

4. 第4トレンチ

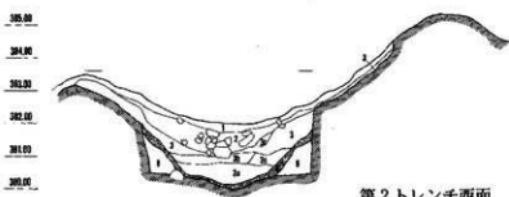
館廻り東南角北側に第4トレンチを設定した。第I層、第II層約0.7m、第III層約1.2m、第IV層の4層から成る。遺物はほとんど出土しない。第III層上部より錢（寛永通宝）（第14図4~13）を検出する。堀の断面はU字に近いV字形を呈している。堀幅約11.5m、現況の土壘頂と堀底の比高約5.5mである。

5. 第5トレンチ

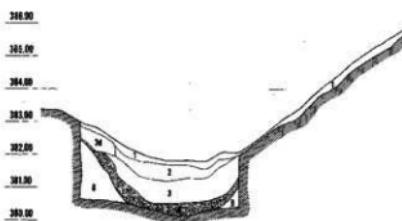
館廻り東側、第4トレンチから北寄りに約6mの場所に第5トレンチを設定した。第I層、第II層約1.2m、第III層約0.8m、第IV層の4層から成る。第III層は更に2層に分かれる。遺物はほとんど出土しない。堀の断面はU字に近いV字形を呈している。堀幅約10.0m、現況の土壘頂と堀底の比高約5.1mである。



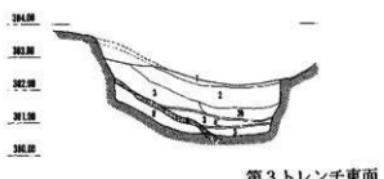
第1トレンチ東面



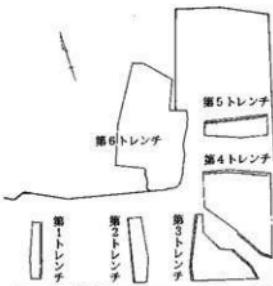
第2トレンチ西面



第3トレンチ西面

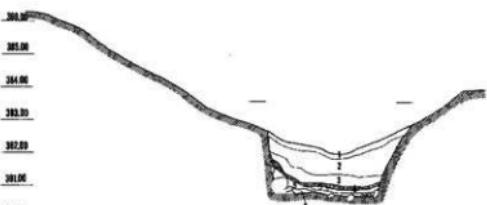


第3トレンチ東面

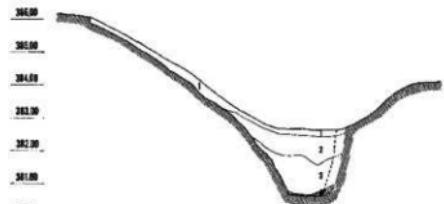


■ 堀底面(推定)

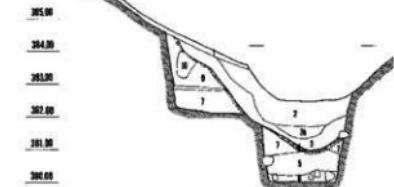
第7図 第1～3トレンチ



第4トレンチ南面



第4トレンチ北面



第5トレンチ北面

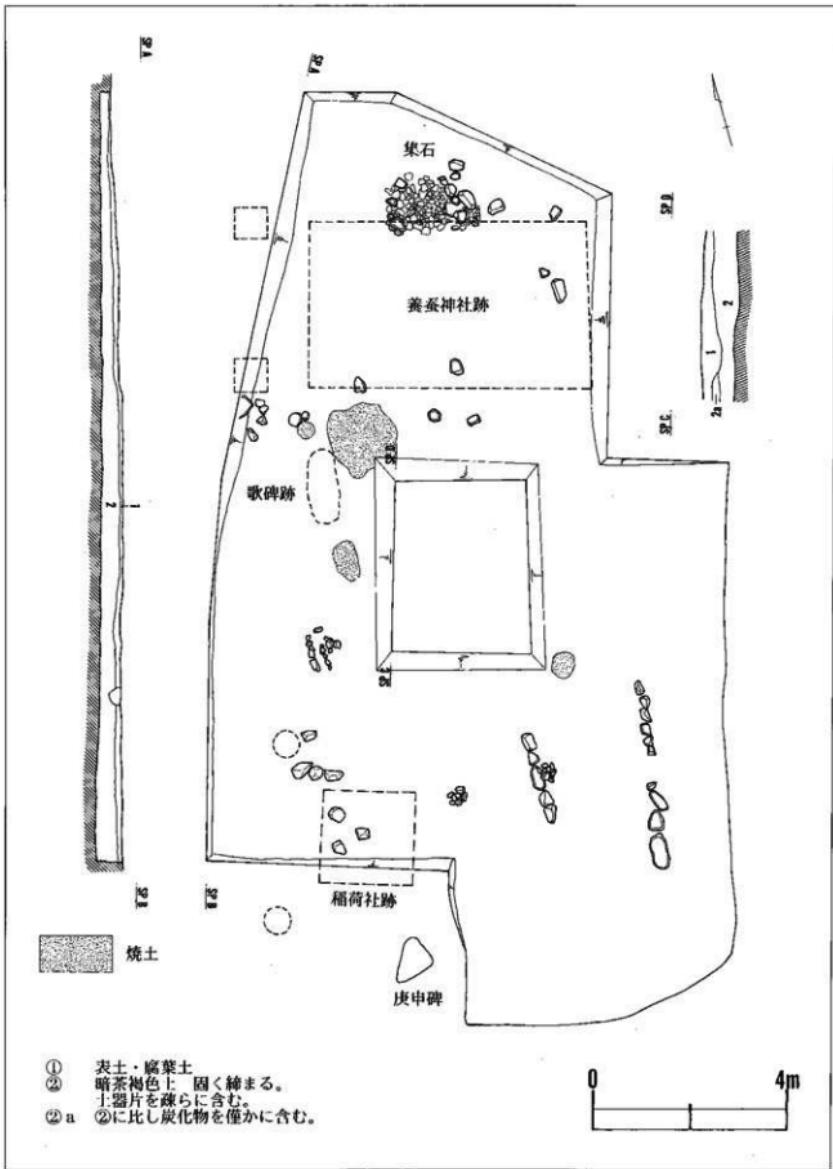


- ① 表土・腐葉土
- ② 砂礫層(砾の大きさは5~50cmまで様々である。) 積間に隙間があるため、近年に廃棄されたものと思われる。
- ③ 茶褐色土 やや砂質で、5~10cmの大の石を疎らに含む。
- ③ a 茶褐色土 やや粘性あり、5~10cmの大の石を疎らに含む。③に比し灰色みを帯びる。含水性のあるやわらかい層で、頼の堆積土と思われる。
- ③ b 茶褐色土 やや砂質で、石を含まない。
- ③ c 茶褐色土 やや砂質で、5~10cmの大の石を疎らに含む。③に比し黄色みを帯びる。
- ③ d 茶褐色土 石を含まない。
- ④ 赤褐色砂質土 1mm程度の砂粒層で5cm大の石を含む。鉄分の付着・酸

化により固く締まる。壙の底部と思われる。

- ⑤ 赤黒色砂質土 ④に比し黒みが強く20cm大の砾を含む。
- ⑥ 赤褐色砂質土 ④に比し砂粒が大きく、固く締まる。
- ⑦ 黄茶褐色土 鉄分の付着・酸化により固く締まる。④に比し赤みが薄い。
- ⑧ 砂礫層(砾の大きさは5~50cmまで様々である。) 積間に隙間がない、②に比しやや赤みを帯びる。夜間瀬川の氾濫による堆積層と思われる。
- ⑨ 盛り土 やや砂質の土と様々な大きさ(3~40cm)の砾を含む。
- ⑩ 茶褐色土 ③とほぼ同様であるが、やや黄色みを帯びる。

第8図 第4、5トレンチ



第9図 第6トレンチ

(2) その他の遺構

1. 第6トレンチ

館内東南角を第6トレンチと設定し調査を行った。この部分は、旧稻荷社・旧養蚕神社・歌碑等が存在したところであり、その撤去の際攪乱されたものか、建物の痕跡は認められなかった。焼土帯が数個所存在するが、土器等を含まず時代は不明である。

また、旧養蚕神社跡北側に以下で述べる集石が認められる。

2. 集石

長辺2m、短辺1.1m、深さ50cmの大きさで、川原石が積み込まれているが、ノリ面は見当らない。平成3年度調査において、貯蔵縦穴・上坑・水溜めを検出したが、これらは人工的に石を積んだものと見受けられるのが、本集石とその性質を異にするところである。

第2節 遺物

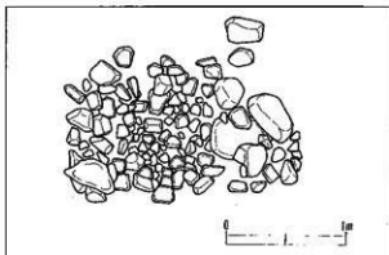
(1) 高梨氏館跡出土の中世土師皿の分類

これまでの発掘調査で出土した高梨氏館跡出土の中世土師皿については、成形技法、形態、大きさにより第11図の様に分類されている。縦軸A、B、C、D、E、F、G、Hは成形技法および形態を基準とした分類、横軸1、2、3は相対的大きさを基準とした分類である。1は大型、2は中型、3は小型のものである。各類の大型の口径の平均はいずれも12cm以上あり、中型は9~10cm、小型は7cm内外となっている。

また、成形技法は大きく「手づくね成形されたA類とB類」と「回転台成形されたC類~H類」に分類される。

A類

大型のA1類、中型のA2類がある。胎土は粉質で、白色に近い。手づくね成形である。やや内湾す



第10図 集石

る体部をもつ。体部には二段の強いヨコナデが認められる。そのため、体部はやや屈曲した感を与える。底部はヘラケズリ、体部下部までヘラケズリがおよぶ。

B類

大型のB1類、中型のB2類がある。胎土は粉質で、白色に近い。底部がヘラケズリされていることから手づくね成形であると考えられるが、断定はできない。体部の立ち上がりは低い。二段の強いヨコナデが認められ、屈曲している。

C類(第13図1)

回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。大型のC1類、中型のC2類、小型のC3類に細分されるが、いずれも体部に強いヨコナデが認められる。C1類の胎土は赤褐色で細かい粒子を含む。C2類の胎土はやや粉質、C3類の胎土は粉質である。

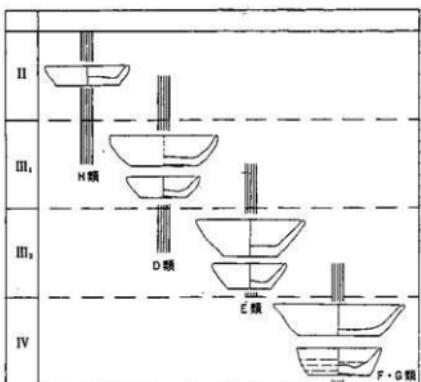
D類(第13図2~6)

本遺跡で最も出土数が多く、主体となるものである。大型のD1類、中型のD2類、小型のD3類がある。胎土はいずれも赤褐色の細かい粒子を含む。回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。体部がやや内湾する形態のもので、最も出土数が多い類である。D3類は体部の立ち上がり部分、および口縁部に強いヨコナデが二段認められ、形態的特徴を形成している。しかしながら、形態的なバリエーションがあり、E3類と明確に分離できないものが

若干認められる。

	I	II	III
A			
B			
C			
D			
E			
F			
G	.		
H	.		

第 11 図 高梨氏館跡出土の中世土師皿の分類



第 12 図 高梨氏館跡出土の中世土師皿の変遷

E類(第 13 図 7 ~ 11)

大型の E 1 類はなく、中型の E 2 類、小型の E 3 類がある。胎土は赤褐色を呈し、細かい粒子を含む。回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。底部から外反するように体部が立ち上がる頗である。D 類に認められるような強い二段のヨコナデは認められず、体部は直線的な輪郭をもつ。

F類(第 13 図 12)

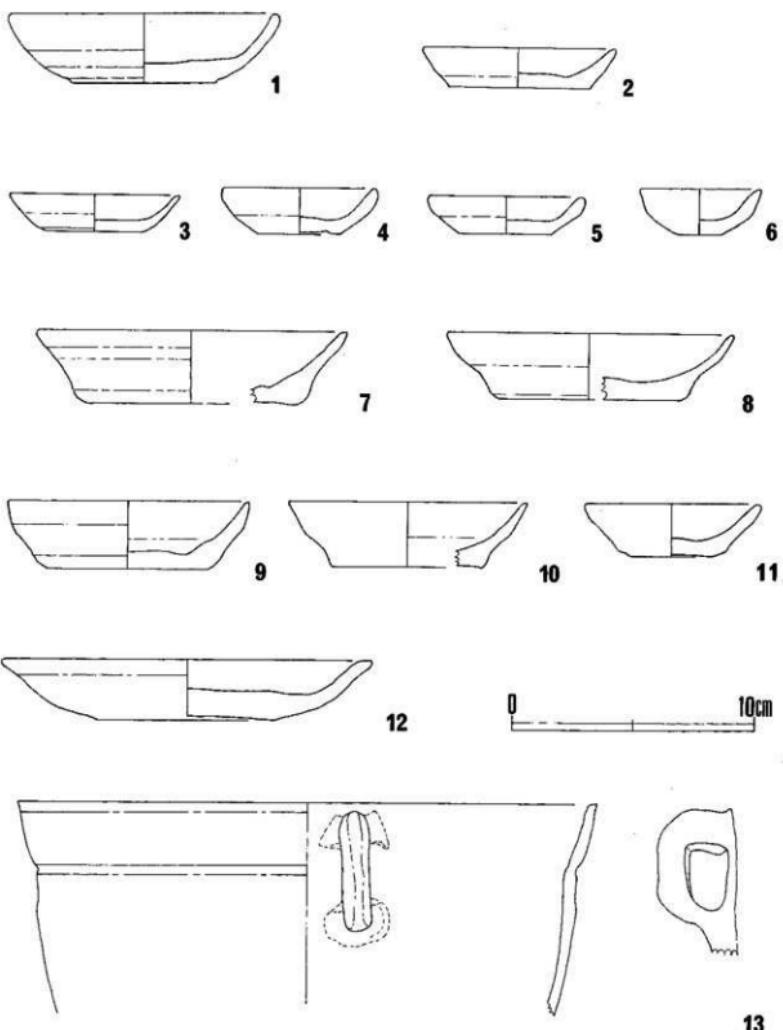
大型の F 1 類、中型の F 2 類がある。回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。底部から外反するように体部が立ち上がる頗である。口縁部が外反する形態的特徴をもつ。

G類

回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。底部から急角度で直線的に立ち上がり、強いヨコナデ痕を内外面とも残す。胎土は赤褐色で細かい粒子を含む。やや赤味の強い色調をもつものが多い。

H類

回転台で成形され、底部に糸切り離し痕を残す。体部の立ち上がりが底径に比べて小さい形態的特徴をもつ。強いヨコナデ痕が立ち上がり部に一段認められる。



第13図 土器

土 器 觀 察 表

図版番号	出土地点	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備考
図 13-1	トレンチ 3	中世土師器	燈明皿・杯	11.0	6.0	2.8	C-3
図 13-2	トレンチ 3	"	"	7.8	5.8	1.6	D-3
図 13-3	トレンチ 6	"	"	7.1	3.8	1.5	"
図 13-4	トレンチ 3	"	"	6.2	3.4	1.9	"
図 13-5	トレンチ 3	"	"	6.2	3.8	1.6	"
図 13-6	トレンチ 6	"	"	4.9	1.8	1.9	"
図 13-7	トレンチ 1	"	"	12.8	8.6	3.0	E-1
図 13-8	トレンチ 1	"	"	11.8	7.6	2.7	E-2
図 13-9	トレンチ 1	"	"	10.0	6.8	2.8	"
図 13-10	トレンチ 1	"	"	9.8	6.2	2.7	"
図 13-11	トレンチ 6	"	"	7.3	3.4	2.2	E-3
図 13-12	トレンチ 6	"	"	15.0	7.4	2.5	F-1
図 13-13	トレンチ 3	"	内耳土器	30.0	不明	不明	

(2) 高梨氏館跡出土の中世土師皿の編年

本遺跡出土の中世土師皿各類の編年については、既報告（「高梨氏館跡発掘調査報告書」1993.3 長野県中野市教育委員会、「高梨氏館跡発掘調査報告書 東小口調査」1995.3 中野市教育委員会）に譲るが、概ね以下に編年される（第12図）。

第Ⅰ期：13世紀代

本遺跡では出土しない。

第Ⅱ期：14世紀代～15世紀前半

本遺跡のH類（器高が低く、立ち上がり部に一段のヨコナデが認められる類）がこの段階に相当するものと考えられる。

第Ⅲ期：15世紀後半～16世紀前葉

本遺跡のD類がこの段階に相当するものと考えられる。

第Ⅳ期：16世紀中葉

本遺跡のE類がこの段階に相当するものと考えられる。

第Ⅴ期：16世紀後葉

本遺跡のG類・F類がこの段階に相当するものと考えられる。

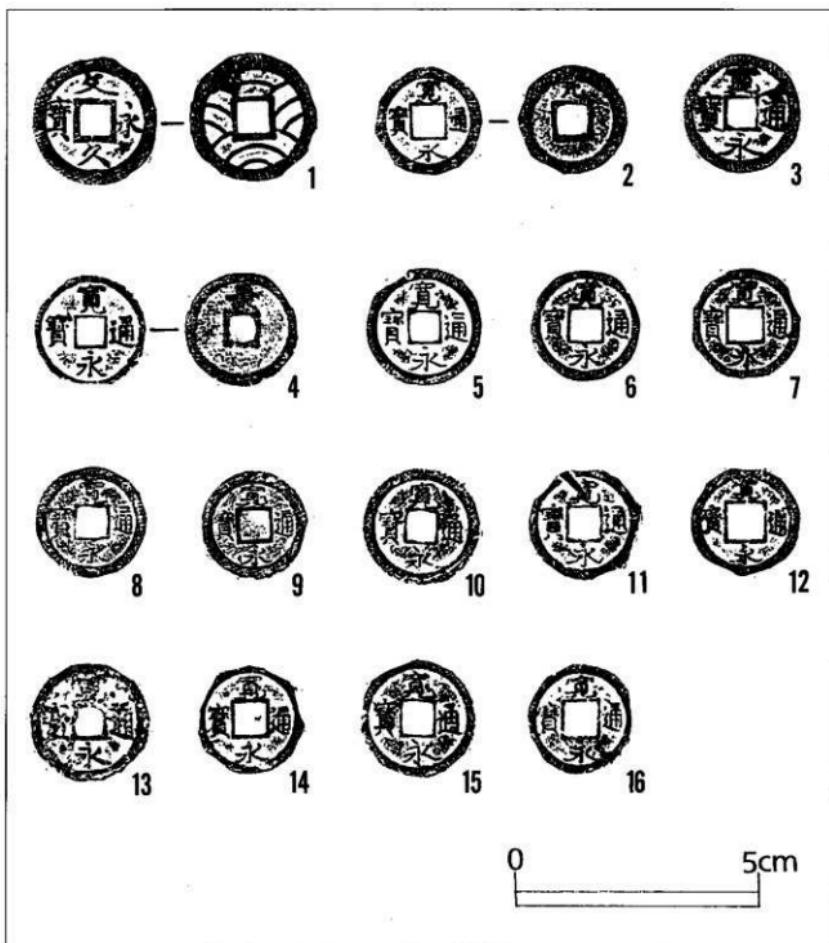
以上のように、本遺跡出土の中世土師皿の各類は、14世紀代から16世紀代にかけてのものであると考えられる。量的にはD類・E類の出土量が80%を占めており、15世紀後半から16世紀代中葉の中世土師皿が圧倒的に多いということができる。なお、A類・B類・C類の類例を得ることができなかつた

など、まだ多くの課題が残されている。

(3) 錢貨

錢貨(第14図)は、寛永通宝15枚・文久永宝1

枚・錢種不明3枚の計19枚が出土した。出土場所は第2表とのおりであるが、初鋳年が江戸時代であり、またそのほとんどが第2～4トレンチに集中していることから、流れ込みと思われる。



第14図 錢貨

出土錢貨一覽表

拓本番号	出土遺構	錢貨名	拓本番号	出土遺構	錢貨名
1	第2トレンチ	文久永寶	9	第4トレンチ	寛永通寶
2	第3トレンチ	寛永通寶	10	"	"
3	"	"	11	"	"
4	第4トレンチ	"	12	"	"
5	"	"	13	"	"
6	"	"	14	第6トレンチ	"
7	"	"	15	"	"
8	"	"	16	"	"

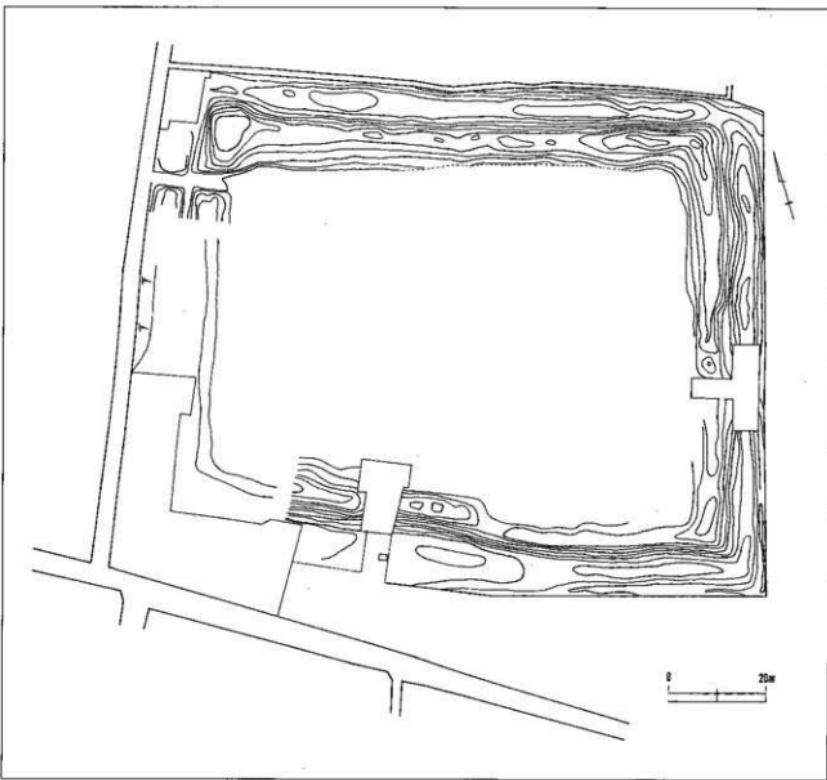
第3節 館廻りの堀の比較検討

作成している(第15図)。

館跡は現状では方形単郭で、「館廻り」の家臣など
の屋敷跡や、防御施設は確認されていない。館の堀
まで含めた規模は東西約130m、南北約100mで、土
塁は四周に残っている。しかし、後世に改変をうけ
たところがあり、近世から現代に積まれた石積みも
ある。

高梨氏館跡の発掘調査は、前述のとおり、昭和62
年度から平成4年度まで6ヶ年継続で行われた。平
成2年の調査では、土塁及び堀の現状での実測図を

土塁は館内部から計測すると1~3mの高さで残
存し、状態の良いところでの土塁基底幅は約10mで
ある。堀幅は6~8.5mであり、館を四周している。し
かし、堀についてはトレンチ調査のみであり、その
全容を明らかにはしていない。堀底から残存土塁の
頂部までの垂直壁高は、7.4m(実効壁高11m)
に達するところもある。土塁の断ち割り調査では、
中心に築地盤をつつみ込んだ土塁が南面(側)に
あった(平成元年度調査)。築地盤の時期、これに両



第15図 これまでの土塁・堀 平面図

面から盛土した時期、全面に堀の土砂を搔き上げて、堀と土星の防備を強化した時期（現状の姿）の、3段階の画期を認めることができる。

1. 北面中央の土壘（平成2年度調査）

内側中段に石積みがあり、土星の半分の高さまでは、版築による砂質土と暗褐色土の瓦層とからなっている。上部は搔き上げで高さを増す、2時期の改築が予想される。北面東よりの土星の調査では、基層に直角方向の砂利を含まない砂壌土による土盛があった。ここに石積みや炭・灰層があり、中段に石積みを伴う、搔き上げ土砂による土星が構築されている。ここでも2時期の重複が確認されている。

2. 東面北の土壘（平成2年度調査）

搔き上げ土砂の下に砂礫の縮まった土層が約80cm、砂利層が20cm、砂壌土の縮まった層が約1mある。その下層には径30～40cmの川原石の面を内側に揃えた石列の下部遺構がある。これは内面の発掘遺構面と同一であった。

周囲する堀の断面は、U字形またはV字形で、石積みなどは施さず、素掘りで、空堀とみられている。しかし西面北の小口上橋と、東面小口の土橋は同じレベルであり、東小口東の道の北側には東へ流れる溝を伴っており、夜間瀬川の乱流に備えたものかも見られる。

堀については平成元年度に3か所を掘削し調査した。いずれの地点も江戸後期までは、かなり旧状を保っていたらしいが、その後急速に埋められていった。

1. 南面現入口地点の調査（平成元年度調査）

南面の調査点では、表層、石炭ガラ層が約0.5m、石礫に近世の陶器・瓦片の混じった層が1.4mある。それ以下は中世の層が0.8m堆積していて、それとのその底部から珠洲窯系・常滑窯系の陶器、輸入青磁片などと、中世土器片が検出されている。堀の断面はV字形で薬研堀の形を示している。底の部分から高さ1mあたりまで、厚さ10cmの黄色粘土が張

られたようになっているが、これは漏水防止でなく、砂礫土の崩落防止の措置かとみられ、空堀であったと考えられる。この堀底まで土壘上から7.4mの落差があり、戦国時代の構えのきびしさを表している。堀の幅約8.5m、南の平面からの深さは約3mである。
.....89-02

2. 北面中央地点の調査（平成元年度調査）

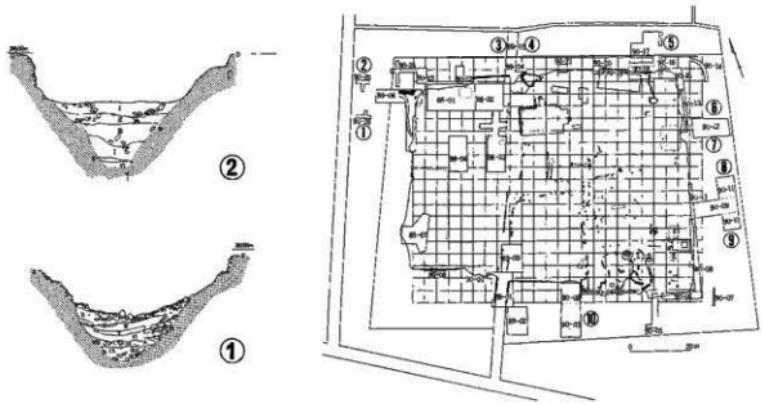
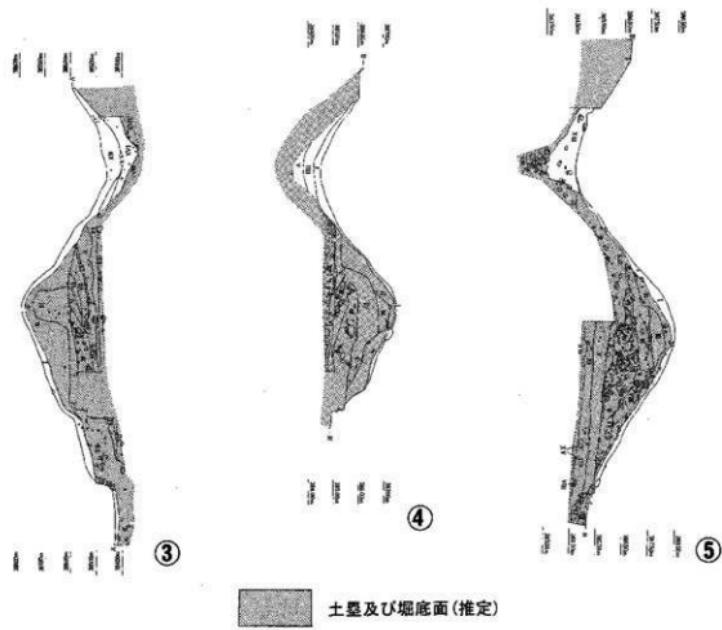
北面の調査地点の堀は、表層から堆積黒土層が1.5m、黄色粘土層が0.7mで、外側に広がっていたが、道路と宅地に遮られて調査はできなかった。嘉永6年間に開かれた諏訪町の屋敷割り以後、狹められたらしく、復元すれば堀幅は7m前後とみられる。土壘上から堀底までは4.25mの落差で、断面は現段階ではU字形のようであるが定かでない。
.....第16
図③④

3. 西面土橋地点の調査（平成元年度調査）

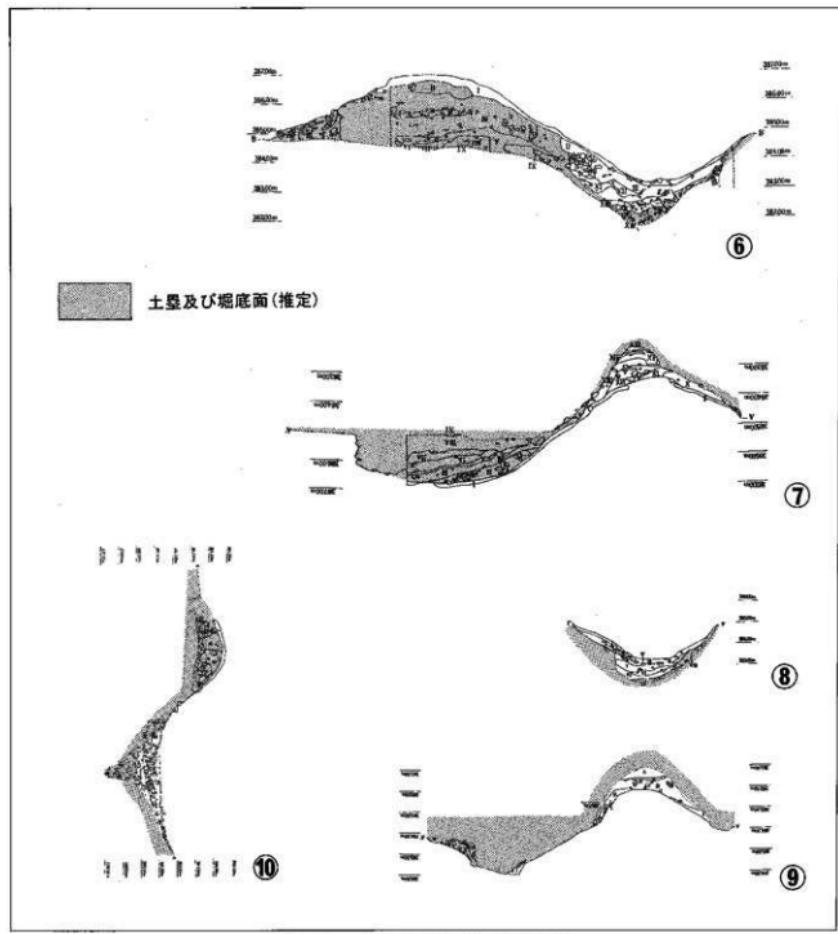
西面の調査地点では、堀幅約8m、土壘上から堀底まで4.6mである。ここは中世層も石で埋まっているが、あるいは土星の外法の石積みが崩落したためかもしれない。落し積みの石積みについては、前に述べたとおりである。土橋の北側の堀とは1m以上の差があって深く、底はU字形を呈しているかのようである。この入口の道路面から両側に犬走りの石積みが残っているが、中世までさかのぼるのか定かでない。
.....89-06

4. 西面土橋南側堀の調査（平成2年度調査）

土橋南側の石積みは2段に構成され、上段の石積みは「落し積み」（谷積み）に類似した手法で積まれており、近世以降の築造、または積み直しと考えられる。下段の石積みは「布積みくずし」の手法で、東面入口土橋南側（調査地点90-16）の石積みと類似する点が注目される。堀はこの石積み下部でテラスを作ってさらに傾斜して深く、そこから-3.6mで堀底に達する。この堀の断面はV字形を呈し、底辺から約0.5m埋没したところで内側に石積みが張り出している。この堀底から現土壘上まで6.3mの落



第16図 これまでの土壌・堤 断面図 (1)



第17図 これまでの土壘・堀 断面図(2)

差があり、堀幅は約9m、東の土壘の基底幅(敷)は約9.5mである。……第16図①

5. 西面土橋北側堀の調査(平成2年度調査)

堀の埋没層は2.5m余に達し、近世末期から中世にかけての6層に識別できた。北壁面では長径0.3m程の石がみられるほか、埋没土層の中から中世土師

器が出土した。堀底から1.5m上に幅1m以内の黄褐色の粘土層があり、土橋側に傾斜していた。これは南面の堀(89-02, 90-03)で検出されたものと同質である。

堀の断面はV字形で、堀底から西側道路上まで4.4m、東の土壘上(隅の最高所から-0.72mの位置)まで6.8mである。道路面までの堀幅は7.8mで

あるが、道路側は新しい石積みになっており、旧状では9m位あったと考えられる。………第16図②

6. 北面東側土壘の調査（平成2年度調査）

現土壘上から2.5m下までは扇状地特有の砂礫層で構成され、したがってこの部分は、同一時期に築造された可能性がある。現状の土壘基底幅は8m、高さ2.5m、石積みからの土壘の厚さは3.5m、発掘した堀の底から土壘上までは5.5mの高さである。堀幅は現状6mを数えるが、北側は住宅地の影響から埋没がはなはだしい。………第16図⑤

7. 東面北側土壘・堀の調査地点（平成2年度調査）

土壘の内側は石積みが続いている。土壘の下層部は、礫の少ない砂利を含む薄茶褐色土であり、30～60cm堆積していた。土壘の基底幅(敷)は6.7m、高さ1.9m、発掘した堀底から現土壘上までは4.75mの落差がある。………第17図⑥⑦

8. 東入口北側堀の調査（平成2年度調査）

土橋北側も多数の石礫で埋まっていた。これらを除去して石積みの有無を確かめたが、遺構は検出されなかった。東側の堀縁に石積みが残っていた。

堀底部分の土砂は、鉄分が沈着して硬化していた。堀の断面は鋭いV字形にならず、U字形に近い形をしていた。ここからは珠洲系陶器壺鉢片・羽口、中世土師器・染付・青磁・鉄滓などが出土した。………第17図⑧

9. 東入口南側堀の調査（平成2年度調査）

この入口(虎口)の土橋の中央には南北に石積みがあり、その東側は石礫の少ない砂壤土で埋まっていた。土橋南側は多数の大小の石で埋められ、長径0.8m、厚さ10cm程の安山岩の平石もみられる。これを取り除くと、土橋南側から長さ2m、高さ0.7mの石積みが現れた。

堀の中世層以下の出土遺物には、中世土師器・珠洲系陶器・羽口・鉄滓・鉄釘・蛤貝などがみられる。

………第17図⑨

10. 南面入口(虎口)堀部分の調査(平成2年度調査)

この堀幅は10.5mで、上層部は最近の廃棄物で埋められ、その下層に大きな石礫が埋まっていた。この下部に黄色粘土層(厚さ約10cm)が、土壘側の調査地東から西に傾斜して存在した。さらにその下層にも旧状の堀があり、したがって黄色粘土層は、当初の堀がある程度埋まった状態のところに存在したことになる。この堀切断部の位置では、土壘上からの落差は約7mある。また木橋杭あととの検出にも努めたが、発見できなかった。………第17図⑩

11. 庭園東側の土壘と堀の調査（平成2年度調査）

この部分の土壘の高さは、内部から現状60cmの高さで、表土を剥いた面からは1m程である。土壘幅(基底)は3.5m程で、土層は大小の石礫で構成され、普請に意を用いた様子はみられない。また、内部に石積みは確認できなかった。

堀の断面調査では、堀底を確認すると、土壘上から深さ6.2mであった。南側の地表面からの深さは4mで、この面から張り出すように石積みが検出された。長さ約5m、高さ1.1m、粗雑な落とし積み方で、近世以降の遺構と推定される。

12. 南西角の堀（平成10年度調査）

堀の中まで住宅が建築された部分であるため、多くの擾乱が予測されたので、トレンチ方式によるものではなく、対象区全体の堀を振りあげることとした。

現況の土壘頂部と堀底の比高は約7m、現地表面からの深さは約3mを測る。堀幅は推定約7mあり、断面V字形をなしている。

堀に面した土壘斜面には石積みが認められた。石積みは堀の中を宅地化するために積まれたものも一部にはあると考えるが、土壘の内側斜面にも石積みを用いており、土壘に関連したものと考える。

第4章 まとめ

今回の調査は、館の東南角の空堀内と館内的一部について実施した。

空堀については、今年度の調査によりすべての地区の調査を終了したこととなった。これまでの空堀の調査では、いずれの地区においても調査範囲の制限と後世の攪乱によって、空堀の断面をすべて確認できた箇所はなかった。そのため、今回の調査によって確認された空堀の断面については、貴重な成果となった。

その中で、今回の調査結果から特記すべき点は、昨年度調査した館南現通用口横の空堀断面（写真図版27）に確認された大小二つの堀跡との関係である。この遺構については、前年度の調査報告書においては、特に言及されていないため、若干様相を述べる。これまでに確認されている空堀とほぼ同規模の幅約7m、深さ約3m（現地表面から）を測るより戦略性に富む堀跡の断面のなかにもう一つそれよりも規模の小さい堀跡が確認されている。後者の堀跡は、故意による埋め土か、自然堆積によるものか現時点では確定できないが埋まりかけた前者の堀跡を改めて掘りくぼめる形で確認された。残念ながら二つの堀跡の時期差については、遺物等の確認がないため

不明である。今年度確認された空堀は、その後者的小規模な堀跡に対応するもので堀の深さ、方向とも一致する点が多い。しかし、今年度の調査地区においては、後者の堀跡のみ存在し、前年度の空堀調査時点で確認したような状況はなかった。この調査結果は、今後より詳細に分析を加えないと確かなことはいえないものの、これまでの調査結果から明らかとなっている十星方向のずれ、建物跡方向のずれ等から指摘されている幾度かの改修の際に、堀の改修も同時に行われたものと思われる。

土壘内の調査については、庭園横にあたるためこれまでに確認されている遺構以外の配水道構等の検出が期待されたが、拳大の石を配石した小土壘が確認できた以外に特記すべき成果はなかった。

最後に、今年度の調査により本遺跡の調査は、おおむね終了することとなり、公園整備事業もより本格的なものとなる。長年にわたる調査結果を正確にふまえ、この全国的にも貴重な文化財が、これから先も大切に保存され、後世の人たちに心の安らぎをあたえるすばらしい歴史公園に生まれ変わることを願うものである。

引用参考文献

- 中野市教育委員会 1990 「高梨氏館跡発掘調査概報」
中野市教育委員会 1991 「高梨氏館跡発掘調査概報Ⅱ」
中野市教育委員会 1992 「高梨氏館跡発掘調査概報Ⅲ」
中野市教育委員会 1993 「高梨氏館跡発掘調査報告書」
中野市教育委員会 1995 「高梨氏館跡発掘調査報告書 東小口調査」
中野市教育委員会 1999 「高梨氏館跡発掘調査報告書」
郷道 哲章 1987 「小館館跡周辺考」『須高』第25号 須高郷土史研究会
湯本 軍一 1991 「信濃高梨氏城下の景観復原」『中世の村落と現代』
石井 進編 吉川弘文館

写 真 図 版



写真 1 発掘作業風景



写真 2 発掘作業風景



写真 3 第1トレーニング層除去後



写真4 第1トレンチ完掘



写真5 第2トレンチ裸層除去後



写真6 第2トレンチ礫層除去後



写真7 第2トレンチ完掘



写真8 第3トレンチ礫層除去後

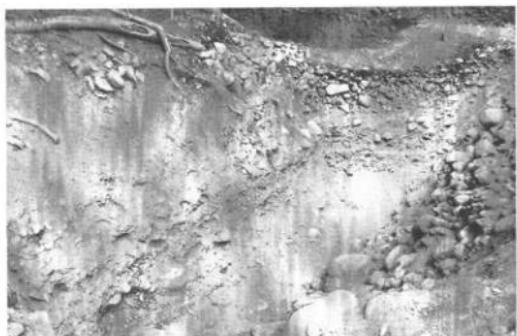


写真9 第3トレンチ完掘



写真10 第3トレンチ完掘



写真11 第4トレンチ疊層除去後



写真 12 第4トレンチ西面石積



写真 13 第4トレンチ完成



写真 14 第4トレンチ完掘



写真 15 第4トレンチ完掘



写真 16 第4トレンチ完掘



写真 17 第5トレンチ完掘



写真 18 第5トレンチ土壁断面



写真 19 第 6 トレンチ表土除去後



写真 20 第 6 トレンチ表土除去後



写真 21 第 6 トレンチ完掘



写真 22 第 6 トレンチ完掘



写真 23 第 6 トレンチ完掘



写真 24 第 6 トレンチ内集石第 1 面